



絵付ヶ舎 薩摩志史

私が、東京のボタン博物館で薩摩ボタンに魅せられて、早いもので22年の歳月が経ちました。ボタンに出会うまでの10年間、お茶道具の絵付けをしていた私に、江戸末期の薩摩ボタンはその小さな面に宇宙の広がりを感じさせてくれました。それから、とりつかれたように「自分の手で、現代の薩摩ボタンを描きたい」と強く思うようになり、試行錯誤しながら、日本の南薩摩の地で細々とボタンを描いている日々です。

花鳥風月や浮世絵の花魁姿など、日本独自の生活文化が描かれた当時の薩摩ボタン。そのレプリカをただ描くのではなく、今の時代を生きる私がデザインする薩摩ボタンは100年後には“アンティーク薩摩ボタン”と言われるようになります。そう呼ばれることに恥じない作品をこれからもコツコツ描き続ける事、それがボタンの神様に白羽の矢を射抜かれた私ができることと信じて絵付けに勤しむ毎日です。

薩摩ボタンのトリビア

薩摩錦手と呼ばれる、薩摩ボタンの絵付け方法は、18世紀当時150年の伝統を誇っていた京都清水の色絵技法を、勉強しに行った陶工たちから始まり開花させたものです。同じ薩摩ボタンでも地方により絵付け方法が違い、薩摩で焼かれる薩摩ボタンは先に金細を入れることが特徴です。金細で輪郭をとり、その中に絵の具を入れ込む、これを絵付けの技法では、「色入れ、色込め」ともいいます。他の地方では、色が先に焼かれ、その上に金細が施されます。後者は使用劣化にともない金細が剥げやすいのが特徴です。

薩摩焼の特徴として、紋様の細やかさもあげられると思います。もともと、茶道具の紋様専門の絵付師だった室田志保は、小さいボタンの面に描かれる様々な紋様もぴたりと円周内に収めることができるのも特徴です。これらの伝統を受け継ぎ、また次の時代へ繋げていく、それが伝統工芸継承者の役割であると思います。



〒 891-2104
 鹿児島県垂水市田神 3718 番地
 Tel : 0994327209
 Mail : info@satsuma.cc
 Online Shop : satsumacc.shop
 薩摩志史 代表絵付師 室田志保

室田牧場

代表の室田修一が生まれ育った鹿児島県垂水市高峠の麓で、黒毛和牛を飼育し早30年となりました。

室田牧場のお肉を一言で言うと、「肉々しい、お肉！」と多くの方から感想をもらっています。赤身に味があり、牛肉を食べた！という満足感が高いのが特徴の一つです。

その背景には、代表の室田修一が、牧場設立30年の間で培った専門知識をもとに、同業者からも「牛の太らせ専門家」として評価が高いことも影響しております。餌をどのように食べたら、どんなお肉に仕上がるかを熟知しているからこそできる熟練の技の一つといえます。



放牧室田牛へのこだわり

室田牧場の牛達が飲む水は、大野原集落の先人たちが開拓した水源地を利用しています。更に、貝の化石、竹炭、備長炭、天照石等をろ過させた水は、まるやかでとろりとした飲料水です。地元の地形を利用した牧歌的な放牧スタイルを推奨し、人の手が入らなくなった山深い土地や、耕作放棄地を整備し放牧地として牛を育てています。自由に動ける広い空間でたくさん運動し、ストレスなく、牛本来の生活をしながら育てる、放牧室田牛は、年間2頭限定のブランド牛となっております。室田牧場の堆肥は、春になると下界の田んぼに撒かれ、そして、秋に米が収穫された後の稲わらは餌として牛に与え、地域循環させております。放牧室田牛は、飼料会社の濃厚飼料に頼らず、自家配合の無添加飼料で育てております。



室田牧場 代表 室田 修一
 鹿児島県垂水市田神 3718 (室田牧場事務所)
 TEL : 0994-32-7209 (平日 9:00 ~ 17:00)
 MAIL : murotafarm@gmail.com

